

【論文】

博物館学習の教育的効果に関する一考察

A Study on the Educational Effects of Learning in Museums

長 畑 実*
Minoru NAGAHATA

1. はじめに

激動する国際社会と地球環境問題の深刻化の中で、人類と地球環境の全面的な危機を回避するための新たな社会経済システム、教育システムの創造が求められている。とりわけ、グローバルな視野と的確な時代認識、人類的課題に対処しうる感性、知識、行動力を持つ人間の育成は問題解決の核心であり、教育の課題である。

しかし、現実の日本社会では深刻な教育の危機(受験地獄、不登校・登校拒否の増大、陰湿化するいじめ、体罰など)が進行しており、夢や希望を語るこのできない中で子どもたちの閉塞感がつのっている。一流大学でも私語が多く講義が成立しないという状況が、世界の中でもっとも教育熱心な国民といわれるこの国の現実を端的に物語っているように思われる。すでに、従来の学校の学力観や偏差値、管理教育は破綻しており、時代と社会の求める新たな教育の創造=教育の質的変革が求められているのである。

こうした中で、文部省は新学習指導要領の実施や総合学科・単位制高校の設置、学校五日制の実施などによって個性を重視した多様な教育の推進などの改革を進めつつある。文部省は「学校教育法施行規則の一部改正について」(注1)を各都道府県教育委員会あてに、「学校五日制の実施について」(注2)を各都道府県教育委員会教育長あてに、それぞれ通達、通知してその中で次のように述べている。

「学校教育法施行規則の一部改正について」

三 留意事項

学校五日制の実施にあたっては次の事項に留意すること。

(二) 家庭や地域社会における幼児児童生徒の生活体験、自然体験、社会体験などをゆたかにするため、遊び、スポーツや文化活動、自然と触れ合う活動、社会参加活動などの多様な活動に参加できる場や機会の一層の充実に努めること。

「学校五日制の実施について」

一 教育課程上及び学校運営上の対応

(二) 学校運営上の対応

(ウ) 社会教育関係の団体や施設、地域住民などとの連携や協力を積極的に図る・・・略

二 家庭や地域社会における幼児児童生徒の体験等の充実

イ 学校施設の開放のほか、公民館、図書館、博物館、青少年教育施設等の社会教育施設や文化施設など幼児児童生徒の利用できる場所の確保に努めるとともに、これらの施設において、幼児児童生徒の活動等に配慮した事業を展開するなどその活用の促進に努めること。

このような上からの改革に対して、土曜日の積極的活用をめざす学校、地域、博物館の取り組みも広がりつつあるが、土曜日が受験塾の隆盛をもたらすなど新たな激しい受験競争が展開されるという事態が進行しており、大学入試制度の根本的制度改革なしには真の改革、創造的な教育の展開が困難な現実があるように思われる。

従って、今や教育の質的変革の課題は、学校教育

* ながはた みのる
名古屋国際高等学校

及び社会教育に関係するすべての人々による独創的な実践・研究の具体的展開によって打開されなければならないと考える。筆者はかかる問題意識の上に学校教育の抜本的改革の課題の一つとして博物館の教育的利用に着目し、学校行事としてワークシートを利用した博物館学習を積極的に展開している。本論では、名古屋商科大学附属高校（1994年4月より名古屋国際高等学校に校名変更）における博物館学習を取り上げ、その教育的効果について考察するとともに、学校教育における博物館利用の課題について明らかにしたいと考える。

2. 学習主体を育てる博物館学習

日本の学校教育のあり方は、従来からその弊害を指摘されているように、机上での文字を通した教科学習優先主義にあると考えられる。幼少期からの激しい受験競争の中で個性を喪失し、学校での学習に対する抜きたい不信感を持って高校へ入学してくる生徒たちに、何とか学問の楽しさ、自ら創造する楽しさを知ってほしいという願いから博物館学習は出発している。

筆者は、1982年より化石採集や鉱物採集などのフィールドワークとその地域の博物館での学習を組み合わせた学校行事を推進してきた。この中で、公共の社会教育施設の存在さえ知らず、活用する余裕さえなかった子どもたちが圧倒的に多いという事実に直面したことが、博物館の社会的使命について考えるきっかけとなった。このような理由から学芸員資格の取得（1987年）をはじめ、より効果的な博物館利用法を学ぶために、主として豪・米の博物館の見学、調査を数年間にわたって行った。この見学、調査から、諸外国では日常的に多彩な博物館教育プログラムが活発に展開されていること、子どもたちが生き生きとして博物館学習に取り組んでいる背景に博物館と学校の緊密な連携があることを確認することができた。その結果、豪・米などの博物館では定着しているワークシート学習から学び、これを活用した博物館学習の展開を行うことに至ったのである。こうして学校教育における博物館利用の可能性への確信を一層深めることができ、全生徒が年間3回以上博物館学習に取り組む学校行事の位置づけを

表ー1 博物館学習に関わる学校行事の経過

1982年度	第1回	理科巡検	岐阜県博物館と根尾谷断層	1991年度	第8回	理科セミナー	名古屋科学館～理工館・天文館 「世界を変えた科学書～科学・工学のルネサンス」
1983年度	第2回	理科巡検	瑞浪市化石博物館と化石採集			博物館学習	野外民族博物館リトル・ワールド
1986年度	第3回	理科巡検	御園天文科学センターと天体観測	第9回	理科セミナー	名古屋科学館～理工館	
	第1回	社会セミナー	京都国博、神戸市博物館等		博物館学習	名古屋美術館～「マチス展」	
					博物館学習	名古屋博物館～常設展・企画展 「原始・古代を遊ぶ」	
1987年度	第2回	社会セミナー	京都国博等	第8回	理科巡検	伊良湖自然科学博物館と化石採集	
	第1回	理科セミナー	名古屋科学館～「地球大紀行展」			タカの渡り観察	
	第4回	理科巡検	阿南町化石館と化石採集		博物館学習	名古屋美術館～「エゴン・シーレ展」	
1988年度		博物館学習	名古屋美術館～「20世紀絵画の展開」	1992年度	第10回	理科セミナー	名古屋科学館～「生命の大進化展」
		博物館学習	名古屋博物館～「シーボルトと日本」	第11回	理科セミナー	東山動物園	
	第3回	社会セミナー	国立民族学博物館、神戸市博物館等		博物館学習	名古屋博物館～常設展・収蔵品展	
	第5回	理科巡検	一宮地域文化広場と天体観測		博物館学習	松坂屋美術館～「1777/78 美術館展」	
1989年度	第4回	社会セミナー	東京・横浜		博物館学習	名古屋博物館～常設展	
	第2回	理科セミナー	名古屋科学館～「人類誕生400万年展」	第9回	理科巡検	根尾谷断層と赤坂石灰岩 (地下観察館と化石採集)	
	第3回	理科セミナー	東山動物園	1993年度	第12回	理科セミナー	日本モンキーセンター
	第6回	理科巡検	豊橋市自然史博物館と葦毛湿原観察		博物館学習	名古屋博物館～特別展「倭国展」	
		博物館学習	名古屋博物館～「古代シリア文明展」	第13回	理科セミナー	名古屋科学館～常設展	
1990年度	第4回	理科セミナー	名古屋科学館～「発明王エジソン展」	第14回	理科セミナー	東山動物園	
	第5回	理科セミナー	日本モンキーセンター		博物館学習	名古屋博物館～常設展	
	第6回	理科セミナー	東山動物園		博物館学習	名古屋美術館～「ウィーン・タワ展」	
	第7回	理科セミナー	名古屋科学館～生命館	第10回	理科巡検	瑞浪市化石博物館と化石採集	
		博物館学習	名古屋美術館～「クノップ展」		博物館学習	名古屋美術館～「ロートレック展」	
	第7回	理科巡検	瑞浪市化石博物館と鉱物採集				
		博物館学習	名古屋博物館～常設展				

行い、教職員の合意形成を進めていったのである。

現在取り組んでいる博物館学習は、「理科セミナー」、「理科巡検」、「校外学習」、「夏の課題」の四つである。これらを一貫した視点は、博物館での学習を通じて、自然や歴史、芸術など人類の文化的遺産に触れて感性を磨き、知的関心を触発して生徒自らが学習を発展させる自己教育力を育むことである。次はその学校行事の経過である。(表-1)

〔1〕理科セミナー（全生徒対象）(写真-1)

校外学習で博物館学習に取り組む場合、自然科学分野に関するものを、特に「理科セミナー」と呼称している。これは、博物館学習が現在のような形で学校行事として定着する以前から「理科セミナー」の名称で博物館学習を行ってきたことの継続として考えているからである。従って、歴史博物館や美術館などでの博物館学習は「校外学習」という名称で一括しているのである。

この理科セミナーは、各学年毎に、各学期1回、木曜日の午後の時間帯に実施している。「校外学習」も同様である。博物館での滞在時間は2,3時間である。これまで博物館学習に取り組んできた博物館は、名古屋市科学館、東山動物園、日本モンキーセンターである（日本モンキーセンターは遠足として一日をあてている）。いずれも事前に入念な下見と博物館側との打ち合わせの上に、本校独自のワークシートを作成している。学校ではセミナー当日までに、できる限り授業時間に資料プリントやビデオテープなどを活用した事前学習を行うようにしている。

理科セミナーの実施にあたっては当初から次のような位置づけを職員会議で確認している。

①自然科学に関する具体的な事実と基本的な知識をワークシート学習と博物館でのレクチャーによって体験学習する。教科学習の一部。

②卒業後も、実社会にある博物館等の研究施設の利用方法に習熟すること。生涯学習の基礎。

③公共の場における集団学習のマナーを身につける。社会常識の養成。

④環境教育プログラムの一展開。

〔2〕理科巡検（希望生徒対象）(写真-2)

毎年秋の土曜日、日曜日を利用した一泊二日の日程で実施している。現在まで10回取り組んできており、いずれも化石採集、鉱物採集、天体観測、湿原観察、タカの渡り観察などのフィールドワークを行うとともに、でかけたその地域の科学系博物館を見学、学習することになっている。この場合も事前の下見を行い、事前学習プリントを作成して参加者に配布している。宿泊先では、スライドなどを利用して翌日のフィールドワークへの具体的なイメージができるよう指導を行っている。

参加生徒は毎回20～30名ほどで、実際に現地に다けて自然にじかに接することの教育的意味を生徒の姿が端的に示している。化石や鉱物の発見にわき上がる歓声や天体望遠鏡に夜を徹してしがみついている姿から、自然の持つ強烈な教育力を感ぜずにはいられないのである。こうして自然に親しむとともに、具体的な器具・機器の扱い方や観察などを通して自然学習の方法に習熟し、自然の豊さと自然と人間との関係、自然保護について体験学習することができるのである。博物館での見学、学習を併用することは、その知識の理解、定着にとって一層効果的



写真-1 「人類誕生400万年展」での博物館学習



写真-2 理科巡検・岐阜県での化石採集

であると思われる。

〔3〕校外学習（全生徒対象）（写真－3）

前述の理科セミナー同様、各学年毎に、各学期1回、木曜日の午後の時間帯に実施している。博物館での滞在時間は2,3時間である。博物館が遠方にある場合は、「遠足」という形態をとって朝から午後3時頃までの時間をとることにしている。校外学習としては、歴史や民族学、芸術科目関連の博物館などを対象として実施している。しかし、教科にとらわれず重要と思われる特別展、企画展などは積極的に利用するようにしている。その主旨は、博物館学習に取り組むことで知的関心を触発し、日常生活を振り返って自らの生き方を見つめ、問題意識を明確にして自覚的高校生活を送る事ができるようにする、ということである。事前の下見からワークシートの作成などは理科セミナーの場合とまったく同じである。これまで取り組んだ博物館は、名古屋市美術館、松坂屋美術館、名古屋市博物館、リトルワールド（野外民族博物館）などである。

〔4〕夏の課題（生徒選択）

夏休みには1、2年生の生徒を対象に、理科の夏の課題の一つとして「自然系博物館の見学記録」の提出を呼びかけている。これは、夏休み中に自然史博物館や化石博物館、水族館、動物園、科学館などの博物館を2つ以上訪ね、

- ①館の見取り図と概要（建物の外観写真）
- ②展示の内容・工夫
- ③もっとも注目した展示
- ④主な展示の写真（許可を得た上で）
- ⑤感想・意見

の5点について、レポート用紙5枚以上にまとめるという内容である。

1クラス平均10名ほどの選択生徒がおり、彼らの作成したレポートからは、すぐれた感性を読み取ることができる。また、「こんな博物館だったら行ってみたい」と思わせるユニークな報告が述べられており、高校生にも博物館を評価することのできる能力があることを確認することができるのである。レポートで取り上げられた主な博物館は、大恐竜博（幕張メッセでの特別展）、鳥羽水族館、葛西臨海水族園、大分生態水族館、名古屋市科学館、銀河宇宙オデッセイ展（百貨店催事場での特別展）などである。



写真－3 名古屋市美術館でのレクチャー

以上のような博物館学習の積み重ねによって、確実に生徒の意識が変化し、博物館の社会的な使命への理解が拡大するとともに、博物館を利用する主体者としての意識が育っているのである。

3. 結果から見た博物館学習の教育的効果

今日多くの博物館で見られる学校団体の見学の様子は、引率教員が入口まで誘導し、後は生徒が筆記用具もメモ用紙も何も持たず、自由に館内を走り抜けるだけのものになっている例がほとんどである。大多数の学校教育の現場では、依然として博物館は「単なる遠足、社会見学」の場の域を出ていないのが実状のようである。筆者が、豪・米などの博物館の見学、調査の中で確認できたものとの乖離を痛感している。豪・米などでは、博物館は市民生活に根ざし、市民のライフスタイルの一部になっており、誰でも、いつでも、自由に、自然や歴史、文化などについて正しい理解と知識をうることができ、それを保障する博物館側の受け入れ体制が確立しているのである。

このような豪・米などと異なる日本の状況の中で、筆者が推進してきた博物館学習の教育的効果については、大きな制約があることも指摘しておかなければならない。一つは、後に触れる学校教育にかかわる根本的問題であり、もう一つは、博物館と社会の構造的問題である。しかし、具体的な実践の展開なくしては、状況を変えることができないのは自明のことである。目の前の生徒たちの個性をのばし、創造的生き方のできる自主的人格を形成するために、教育の現場ではあらゆる創意と英知を結集した実践が必要とされているのである。そこで、まず博物館

学習実施後の生徒の意識の変化をたどることによって、何をどこまで変えることができたのかを、実施後のアンケート結果に基づいて考察したい。

〔1〕日本モンキーセンターの場合

この博物館学習は、「遠足」の形態をとって1991年6月に実施された。当日の日程は、午前9時に現地集合し、午後3時に現地で解散となっている。実施した学年は高校1年生である。

事前に配布された実施要項には次のように記載されている。「日本モンキーセンターは、世界最大のサル類動物園として約90種類900頭のサルを一般公開するとともに、教育普及活動のセンターとしてのビジターセンターを充実させ、生徒から研究者にいたるまで幅広い層に対応できる『サルの学習広場』を昨年完成させている。今回はこの施設を利用して学芸部の方からレクチャーを受講し、サルからヒトへの進化を含めたサルの進化や生態・形態について学習し、生きたサルの観察とワークシート学習（表-2）を通してサル類の現在の姿と、環境問題の中

で絶滅の危機に瀕している実態について理解を深め、前述の4点の目標を達成していきたいと考えている。」（※4点の目標とは、前述の理科セミナーの意義のことである。）

次に、博物館学習終了後、学校において行ったアンケート調査の結果について主な項目別に考察したい。なお、当日はあいにく雨の降る悪条件下であったことを付記しておきたい。

（1）日本モンキーセンターの見学回数

（*アンケートの回答者数は1年生116名である）

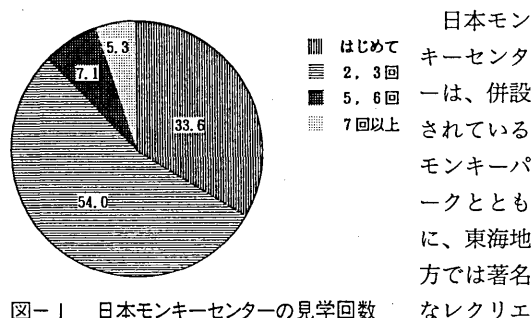


図-1 日本モンキーセンターの見学回数

表-2 モンキーセンターで利用したワークシート（一部）

1990理科セミナー

日本モンキーセンター ワーク・シート

私達の住むこの地球という惑星には、知られているだけでも動物100万種、植物50万種、細菌類2000種、これに未定数のものを加えると500万種の生物が生息しています。また、最新の熱帯雨林の研究成果を合わせると3000万種というとても数多くの生物が生息しているといえます。それらの生育環境が、この地球のあらゆるところ（深海底から高山まで）に広がっていることもよく知られています。この地球上の生命の起源は、35億年前にさかのぼります。35億年という悠久の時間の流れの中で、今日の生物の多様性がもたらされたのです。ヒトもその一部です。この進化は今でも続いていますから、地球上の生物は生きた「博物館」のようなものです。

日本モンキーセンターは、世界中のサル類を収集した世界でも唯一のユニークな動物園です。動物園の使命は、教育 EDUCATION・保護 CONSERVATION・研究 RESEARCH・レクリエーション RECREATION の4つです。日本特有のサルから世界の珍しいサルまで90種近い多くのサルが飼育されていますが、ただ漠然と見て「おもしろい」というだけでは、動物園の役割は理解できません。生きている実際のサルたちをじっくり観察し、猿長類の進化やそこに見られる形態や生態等の特徴を発見して、動物園を科学的・知的に楽しむことができる積極的な見学者・利用者になってほしいのです。そして、それを通して自然を豊かに捉える力を養い、自然破壊と野生生物の現状を正しく捉える力を鍛えて下さい。

なお、双眼鏡・カメラ（ストロボは禁止）・テープレコーダーなどを利用すると一層興味深い観察ができるでしょう。半日という短い時間ですが、時間を有効に活用して動物園学習を楽しんで下さい。



記入者	年	組	番
氏名			

名古屋商科大学付属高等学校

ワーク・シート ①

- (1) マンドリルは、自然界ではどのようなところに生息しているか。
- (2) マンドリル（霊長目オナガザル科）は、哺乳類にはめずらしく色彩豊かなサルである。全身（顔・尻など）を観察して体の各部の色彩を指摘せよ。
- (3) マンドリルや他のヒヒは、おりの中でどのようにすわっているだろうか。
- (4) オナガザル科としての尾はどうなっているか。
- (5) クモザルと身体の違いを述べ、何故その違いがあるのか簡単に説明せよ。

ワーク・シート ②

- (1) ワオキツネザルとスローロリスの生息地はどこか。
- (2) 下等な霊長類のワオキツネザルとスローロリスを比較して顔（目や鼻）や指、尾の特徴、運動のしかたをよく観察して説明せよ。
- (3) ボンネットモンキーの生息地はどこか。おりの中での移動のしかたを簡単に説明せよ。
- (4) コロブスとホエザルの移動のしかた（腕の使い方など）をよく観察して指の特徴を調べ、それらの生活とどうかわっているかまとめよ。

ワーク・シート ③

- (1) クモザルの生息地はどこか。
- (2) クモザルの運動を観察して、全身・腕・手・指の特徴を調べよ。
Q1. 指は、短い ・ 長い
Q2. 親指は、ある ・ ない
Q3. 尾の毛はどのように生えているか。
Q4. 1～3のようにになっているのは何故か。理由を考えて説明せよ。

ーション施設である。年少者対象のアニメ主人公などを登場させたイベントなどで多数の行楽客を集めている。こうした施設の割には、「はじめて」が33.6%と大変多いことに驚かされる。「2,3回」が54.0%と大多数を占めているのは、幼稚園から中学校までの遠足による利用と思われる。これに対して5回以上の利用者がわずか12.4%というのは、博物館の継続的利用が定着していないことを示す数字でもあると考えられる。

(2) モンキーセンターでのレクチャー

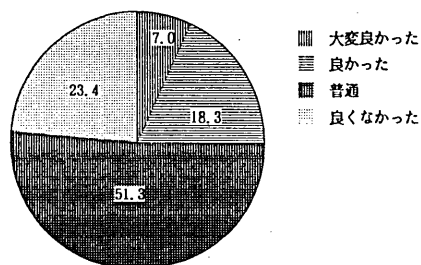


図-2 日本モンキーセンターでのレクチャー

入園後、学習ホールにおいて学芸員の方から「サル類の進化と形態」について30分ほどのレクチャーを受講した。これについては積極的に評価した生徒が25.3%で、これに受動的な肯定評価をくださった生徒を加えると76.6%となる。その一方で、「良くなかった」生徒が23.4%というのは、学校での教科学習に対する拒否的態度をとる生徒数とほぼ同一であり、いつも否定的見解を表明する生徒の層であるように思われる。これらの層は、どんな設問にもほとんど拒否的に回答している存在であり、こうした生徒を変革していくことは、現在の教育の重要な課題であると考えている。

(3) ワークシートを利用した学習

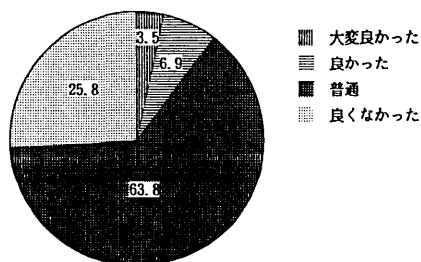


図-3 ワークシートを利用した学習

約11%の生徒が積極的に評価しており、これに「普通」の受動的肯定層を加えると約74%の生徒が肯定的に評価していると思われる。はじめて博物館学習に取り組んだ1年生の結果としてはまずまずである。

(4) ワークシート利用によるサル類への興味や理解の深まり

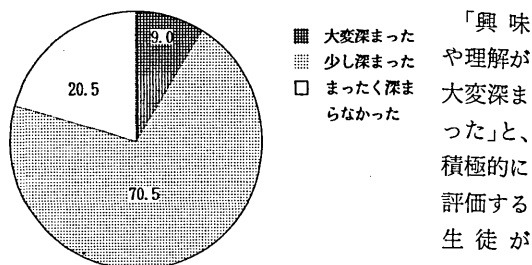


図-4 ワークシートによる興味や理解

「興味や理解が大変深まった」と、積極的に評価する生徒が9%、これに「少し深まった」を加えると肯定的な評価をくださった生徒は80%となる。ここでも否定的評価をくださった生徒は20%にのぼっているが、激しい雨模様の中で、びしょ濡れになりながら傘をさして観察し、ワークシートに記入するという生徒の努力の方を高く評価すべきであると考えている。

(5) 今回の博物館学習による動物園の見方の変化

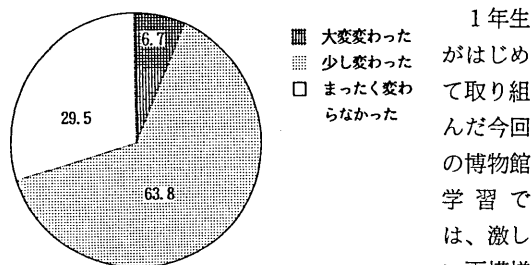


図-5 博物館学習後の動物園の見方の変化

1年生がはじめて取り組んだ今回の博物館学習では、激しい雨模様という困難な条件の中でも70%の生徒が、これまでとは違った動物園の見方を感じとってくれたようである。しかも、「大変変わった」と答えた生徒のうち75%が、「他の人にもこうした動物園の見学の仕方を教えたい」と答えていることは、博物館学習のプログラムを継続、展開することによって、動物園の社会的使命とその利用方法を確実に青少年、市民の中に普及していくことができることを示唆していると思われる。

さらに、簡単な感想として、「雨が降らなかったらもっと良かったけど、結構良かった。なぜかという、少しは動物園の見方が変化したからである。見るだけの動物園なんて面白くないと思った」「今度モンキーセンターへ行ったら、センターの人の話を思い出してじっくり見たい」「サルの種類や行動

のパターンをよく理解することができた。時間が少なかったけれど中身の濃い、よい学習ができたと思う」「こういう企画を進める学年の係をつくってプログラムなどを作ったらどうか」などの積極的な評価、提言をする生徒も現れ、1年生のはじめての博物館学習としては貴重な成果と教訓を得ることができた。

〔2〕名古屋市美術館「マチス展」の場合

この博物館学習は1991年9月、平日の午後2時間を利用して実施された。美術館での鑑賞教育は、最近になってようやく取り組みが進みはじめた分野である。筆者の勤務する高校では、この時点ではまだ教育課程の芸術科目に「美術」の科目が設置されていなかったため、筆者が美術館の下見、打ち合わせなどを行った上でワークシート（表-3）を作成した。実施にあたっては、マチス絵画の美術史上の位置やマチスの生きた時代と社会の動きなどをまとめたプリントを作成して配布し、一定の基礎知識が理

解できるように配慮した。実施した学年は2年生である。次に、博物館学習終了後、学校において行ったアンケート調査の結果について主な項目別に考察したい。

（1）名古屋市美術館を利用した学習

2年生はすでに1年生の段階で3回にわたって博物館学習の体験をしており、積極的に評価する生徒が30%と増加・定着し、受動的に肯定する生徒を加えると80%の生徒が肯定的な評価をくだしている事実が高く評価できる。「良くなかった」という否定的な評価をくだす生徒が20%と減少したことも大きな特徴としてあげることができる。

（2）ワークシートを利用した学習

ワークシート利用への積極的評価が30%に達し、受動的評価をくだす生徒を加えると72%の生徒が肯定的な評価をくだしている。一方、ここでも前述のような否定的な生徒は28%存在している。

具体的な生徒の声には、肯定的な評価をくだした

表-3 マチス展で利用したワークシート（一部）

名古屋市美術館 マチス展ワーク・シート HENRI MATISSE 1869~1954

「私が夢見るのは、心配や気配りの種のない、均衡と純粋さと静謐の芸術であり、……肉体の疲れをいやす良い掛け椅子に匹敵する何かであるような芸術である。」
「私の芸術は、あらゆる画家のおかげをこうむっています。若い頃、ループルで昔の巨匠を模写して、彼らの考えや技術を学びながら製作しました。」
「芸術家の個性は、自分が引き受ける闘いを通して確立されるのだと思います。……私は影響を受け入れましたが、いつもそれを制御できたと思います。」
—— マチス ——

18世紀後半から19世紀はじめにかけてイギリスではじまった産業革命は、ヨーロッパ諸国やアメリカに広がり、各国は巨大な生産力を持つようになった。そして、交通機関の発達・自然科学・技術の進歩といった波が、社会のあり方や人々の生活を急速に変えていった。市民社会の確立と労働運動・社会主義運動の高揚もこの時代の特徴である。しかし、世界は19世紀末から20世紀初頭の第1次世界大戦・ロシア革命・大恐慌からナチスの台頭・第2次世界大戦へと、激動の時代を迎えることとなる。（ちなみに、マチスの妻・娘もレジスタンス運動に参加している）こうした「混乱」の中で、芸術・絵画の分野でも従来の公式化された透視図法・遠近法を打破し、自由な自己表現を確立しようとする人々が登場する。マチスは、この20世紀前半に活躍し、世界の絵画に新しい動きを導いた巨匠である。こうした時代背景を理解した上で、フォーヴィスム野獣派のリーダー格マチスの絵を鑑賞していこう。

1991.9.26 M. Nagahata

記入者	年	組	番
氏名			

名古屋商科大学付属高等学校

美術館での鑑賞にあたって

下記の文章は、芸術の鑑賞にあたって必要な知識をコンパクトにまとめたものです。芸術は人間の真実を反映するために生まれ、生きることへの願い、生きることの喜びをうたい上げることを通して発展してきました。絵画や彫刻、音楽、文学などそれぞれの独特の表現様式で美を創造・表現しているのです。

私たちは、多くの先人がそれぞれの時代に残した芸術作品の鑑賞を通してこうした人間の真実を学ぶことができます。また、多様な表現の観察から色彩感覚を養ったり、想像力を高めたり、表現方法を学んだりすることができます。これらは、私たちの人生をきっと豊かにしてくれるでしょう。そして、美術館に気軽に出かけ、楽しく興味を持って色々なことが理解できるようになれば、すばらしいことではないでしょうか。

M. Nagahata

〔芸術について〕

芸術は人間の精神生活において極めて重要な位置の一つを占めている。芸術は普遍的・全人類的な活動形態であり、社会発展においてある種の巨大な生活的意義を持っている。（「ベルリンの壁」崩壊前後に見られたあの壁一面を埋め尽くした壁画を想起されたい）芸術は社会現象の総体との現実の連関によって、そしてまずなによりも社会の物質的基礎との連関によって説明される。

芸術は人間の感情・意志・思想に対して働きかけ、一定の知識・現実の諸現象に対する一定の評価を人間に伝達することを目的としている。

芸術の本質を理解するためには、たえず社会の現実の生活とのか結びつきを念頭においておく必要がある。

芸術は社会的人間による世界認識の一形式である。芸術によって人間は現実を理解する。芸術の意義はより多面的であり、より豊かである。感情と思想、生活の複雑さと美しさ、人間がその途上で突き当たる喜びと不幸、社会、つまり他の人々との相互関係の中で、人間の前に発生する諸問題のあらゆる解決——こうしたすべてを芸術が我々に明らかにする。これが、芸術の世界認識の社会的・教育的・活動的な力である。芸術の美的機能は、人間の社会的関心のあらゆる豊かさにおいて人間を多面的に発展させることである。

芸術作品は直接的に好きになったり、嫌いになったりすることができるものである。絵画を見た瞬間に心を引きつけられる場合もあるし、いっそうに関心を引き起こさない場合もある。場合によっては否定的反応を呼び起こすこともある。

「もし、芸術を享受しようと思ったら芸術的に教養のある人間にならねばならない。」
—— 『美学の基礎』より

生徒のものとして「友だちと思ったことを言い合いながら取り組めて楽しかった」「普通なら見過ごすような細部まで勉強できて良かった」「ワークシートを利用することで違う角度から観察することができた」「書くことによって深く絵が印象に残った」「好きではない絵でも、それなりに訴えているものを感じとることができたし、その絵の良さを探したりできるから」などがあり、ワークシート利用の長所を的確に指摘していると思われる。一方、否定的な評価をくだした生徒のものとして「書くだけでじっくり見られない」「書くのが面倒くさい」「高校生の学習としては恥ずかしい」「決まった絵に皆が集中してゆっくり見るができない」「まわりの人に迷惑だった」「一般の人に、何でこんな所で字を書いているのと言われた」などがあり、博物館学習の目的・意義が理解されていない状況に伴う不満やワークシート改善の要望を指摘しているように思われる。

(3) これからの美術館利用

「何回も行きたい」と回答した積極的な生徒の7%というのは、他の項目でも同じような数字で現れてくる熱心な生徒である。この熱心さはその顔ぶれを見て

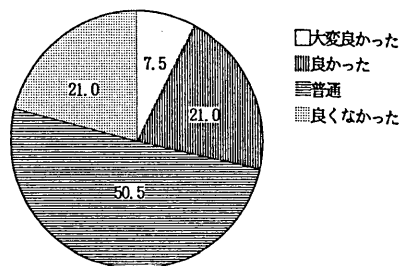


図-6 名古屋市美術館を利用した学習

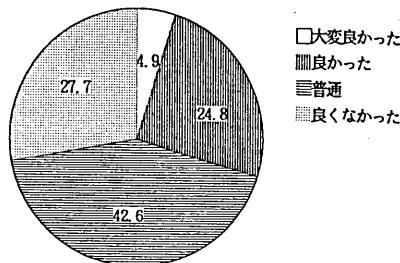


図-7 ワークシートを利用した学習

表-4 エゴンシーレ展で利用したワークシート (一部)

名古屋市美術館 エゴン・シーレ展ワーク・シート

EGON SCHIELE

1890-1918

「ぼくは人間、ぼくは死を愛し、また生を受す。」(自画像Ⅱ)

「ぼくらは世界がかつて見た一番暴力的な時代に生きているんだ。——ぼくらはありとあらゆる不自由に慣れてしまった——何十万という人間が哀れにも破壊していく——誰もが自分の運命を、生きながらあるいは死につつ耐えなければならぬ——・・・1914年以前のことは別世界のことなんだ。——ぼくらはだから常に未来に目を向けるのだ。——希望のない人間は死んでいく人間の仲間だ、——ぼくらは生命をもたすすべてのことに耐える用意がなければならない。嵐のあとに太陽が輝くように、ぼくらもまた太陽を経験するだろう。」(妹ゲルティへの手紙)

—— シーレ ——

19世紀末は、産業革命以降の科学と技術の進歩により、かつてないほどの豊かな物質文明が開花した時代です。ロンドンでの第一回万国博覧会(1851)の後、パリで万博が相次ぎ、1889年にはエッフェル塔が建設されるなど、科学と技術の成果が、科学万能主義を生み、進歩に対する信仰を強く植えつけることになりました。その一方で、ドイツ帝国の成立、パリ・コミューンの成立と敗北、労働運動の高揚と社会主義運動の広がり(1917年にはロシア革命)など世界は激しく変動し、1914年には第1次世界大戦が勃発します。1918年には「スペイン風邪」が全世界に広がり、世界中で1500万から2500万もの人々が死にます。出来事も起きます。混乱と不安の時代、もはや誰もがこれまでと同じ生活をする事が許されない時代になっていったのです。このような科学技術への信仰・合理主義・物質至上主義の風潮と激しい社会変革の嵐の中、国鉄駅長という官吏の家庭にシーレは生まれました。こうした時代と社会の背景を理解した上で、シーレの作品を鑑賞していきましょう。1992.1.12 M. Nagahata

記入者	年	組	番
氏名			

名古屋商科大学付属高等学校

ワークシート N-1

「パレットを持つ自画像」(1905年)

これは友人へのプレゼントとして描かれた油彩画です。15才のシーレはこの絵で自らの将来を明確に意識し、理想化して明示したものと考えられます。

【設問】

1. シーレがどのような将来を目指していたことが分かりますか。絵の中からそれを示す物を具体的に指摘して答えなさい。
2. この絵の中で、赤色はどこに使われていますか。それはどのような効果を絵に与えていますか。
3. この絵からシーレのどのような感情を知ることができますか。

ワークシート N-2

「坐る3人の男のコンポジション」(1910年)

シーレは肉体の言語的表現という未知の領域を探索していました。ポーズや手足の切断(顔や手足のない形象であるトルソの技法)など表現の強弱が試みられています。裸体画への思いはこうしたところ(根源的表現)からもきているようです。

【設問】

1. 人物を黒く塗りつぶしたのは何故ですか。
2. 黒く塗りつぶしたことによる効果をどのように思いますか。

ワークシート N-5

「オレンジ色の服を着て、跪く少女」(1910年)

4才下の妹ゲルティは、繰り返しシーレの絵のモデルとなって登場します。あたかもシーレの分身であるかのように。

【設問】

1. この絵のポーズは不安定ですか、それとも安定していますか。それはどのようなことから感じましたか。
2. この絵の少女の性格をどのように感じますか。それは絵のどんなところからですか。

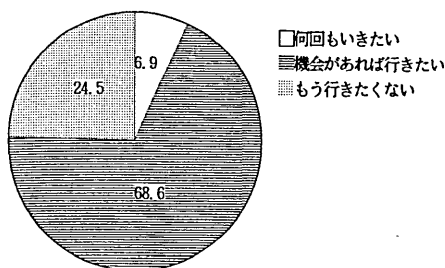


図-8 これからの美術館利用

すなわち、日常の授業の中では目立たない生徒たちが、博物館学習によって主役となる場を得たことで、その個性を存分に発揮することができたと考えられるのである。こうした生徒たちのワークシートの記入内容には、ユニークな視点が見られることも指摘しておきたい。また、「機会があれば」という生徒が69%にも達していることは、こうした行事を生徒は求めており、教師の側が積極的に展開することで、生徒の興味や関心を触発することができることを示していると思われる。

以上、二つのケースについてワークシートを活用した博物館学習の結果を考察してきた。次に、筆者が作成したワークシートを、他の高校がそのまま利用し、「校外学習」を実施した事例に関して、ワークシートに記入した生徒の言葉をもとに、具体的な反応を考察したい。

〔3〕「エゴン・シーレ展」の場合

1992年2月、筆者は愛知県内の「私学教育研究集会」において「博物館を利用した校外学習」をテーマとして研究発表を行った。この時の発表がもとになって、現在県内のいくつかの私学で、学校五日制実施に伴う土曜日の積極的活用の一つとして博物館での学習が導入されている。また、ワークシートを利用してみたいという他高校からの要望をきっかけとして、当時筆者が取り組んでいた名古屋市美術館での特別展「エゴン・シーレ展」でのワークシート(表-4)を共同利用することになった。

実施にあたっては、日程をずらし、美術館で同じレクチャーを受講した後で、ワークシートに取り組むこととした。共同利用した学校が女子校であったことは、本校(男子校)との比較をする上でも大変有意義なものであった。美術館内でワークシートに取り組む生徒たちの様子(写真-4)からは、ワー

みる
と、必
ずしも
教科学
習に秀
でてい
る者と
は限ら
ない。

クシートを利用した博物館学習のすぐれた教育力を読み取ることができる。

次に、「エゴン・シーレ展」アンケートに記入されたさまざまな生徒の声から、具体的な博物館学習での体験、博物館学習への評価などについて考察したい。

- ①すごく難しかったけれど、他校と比べるとずっと内容のある鑑賞になっていたと思います。
- ②ぱっと見ただけでは全然わからないことも、ワークシートに記入していくうちに、「まあ、こういうことなのかな」とか自分なりに理解できたと思う。
- ③ちゃんと質問にそって見られたし、あれがなかったら多分ぼーっとして見、何も思わず、ただ「すごい」「きょうれつー」とか思いながら通りすぎていったと思う。
- ④細かいところまでしっかりと見られて、気づかなそうなところまで気づかせてくれて、とても見がいのあるものになったと思う。
- ⑤少しめんどうなところがあったが、ワークシートの問いかけによって気づいた点も多かった。
- ⑥ワークシートがあったから、より背景というものを理解しようとできたと思います。
- ⑦ワークシートは分からないなりに、ポイント・見どころをつかむという点で役立った。
- ⑧その絵を探すのにてまどり、他の絵がしっかり見られなかったが、どこを見ればよいかとうまく導いてくれたので良かった。
- ⑨ワークシートに時間内で5つ書かなくてはいけなかったもので、少しあせっていたような気がする。書くことで精一杯で、友だちと作品の感想とかを少し



写真-4 「エゴン・シーレ展」での博物館学習

話したかった気がする。

⑩ワークシートを利用したことによって、その絵をいろいろな角度からながめることができた。ワンポイントのアドバイスも、その絵をより理解する手助けとなった。

⑪何か伝わってくるものはあったけど、それをどう受け止めていいのかが分からなかったの、もう少し学習しておけば良かった。

⑫シーレの心がそのまま絵に表れていて、世の中の状態なども絵を見ることによって想像できて良かった。

⑬普通ではなかなか行けないのに、こんな企画があると違った面でよかった。

⑭シーレの絵からは、直線の多用さから力強さ、男っぽさを、縦の線の強調から冷たさを感じる。だから好きではない。

⑮私の好みの絵ではなかったけれど、その時代を感じさせられるものだったと思う。何かが光っていたようにも思えるから。

以上、ワークシートを共同利用した女子高校のあるクラスの生徒の声をいくつか取り上げてみた。これらの内容から、大多数の生徒が博物館学習を新鮮なものとして受けとめ、ワークシートを活用したことによって、生徒自らが感性を最大限動員して教師の予想を越える鋭いものの見方・考え方を獲得していったことが明らかになったのである。ワークシートへの記入を通して発見の喜び、感動を体験することができたことが重要なのである。博物館学習の目的の大きな柱である「ほんものの学問」に触れる喜びを、生徒たちが自ら学んだものと思われる。

このように、ワークシートを活用した博物館学習は、生徒一人ひとりの持っている個性、可能性を引き出し、拡大する有効な教育方法の一つであり、その教育的効果には極めて高いものがあると考えている。これらの実践を通じて明らかになった博物館学習におけるワークシートの要件を、次のようにまとめることができる。

①展示のポイントをつかみ、展示の内容を深めることができるもの。

②感性を刺激し、豊かなものの見方・考え方を育てることができるもの。

③一人ひとりの学習のペースを保障し、発見の喜び・

感動を交流によって共有することができるもの。

④設問と解説に博物館の見どころも付け加えて、博物館を総合的に楽しむことができるもの。

⑤博物館の継続的利用ができる主体的な学習態度を育てることができるもの。

以上、三つのケースについて終了後のアンケート結果から、生徒の意識の具体的な変化について考察を進め、ワークシートの活用がもたらす高い教育的効果とワークシートのあるべき姿について明らかにしてきた。博物館において教室では触れられない実物資料から直接学ぶことは、生徒の感性を刺激し、知的好奇心を触発して、「ほんものの学問」に対する興味や関心を深め、生き生きとした主体的学習への扉を開くものとなるのである。

今後さらに、多くの実践・研究を積み重ねることによってその教育的効果を一層明らかにものとし、学校教育のシステムを変革する要としての位置づけを与えていく必要があると考えている。

4. 博物館学習の課題

全国的な博物館ブーム、水族館ブームの中で、学校教育における博物館の教育的利用についての取り組みは、前述したように大きく立ち遅れている。これは、筆者が数年にわたって見学・調査してきた主として豪・米の博物館の様子とはまったく対照的である。

豪・米の博物館では、日常的に多彩な博物館教育プログラムが展開されており、活発なボランティア制度もそれを支える重要な柱となっている。例えば、アメリカのモンタレー水族館 (Monterey Bay Aquarium) の博物館教育プログラムに参加した学生数は年間9万人に達しているという。これは、モンタレー市 (Monterey) の人口が30万人であることを考えると、ほとんどすべての学生・生徒がこの水族館の教育プログラムに参加していることになるのである。

また、オーストラリアのタスマニア博物館 (Tasmanian Museum and Art Gallery) では、博物館教師による小学生を対象とした授業を参観する機会を得た。引率の教師や父母も同席する中で、15,6名の少人数の生徒に対して、「内骨格と外骨格」をテーマとした授業が、博物館の標本や16ミリフィルム、スライドなどを活用して、立体的に、和気あいあい

のうちに進められていたのである。(写真-5) 同
じく、タロンガ動物園 (Taronga Zoo) の教育部
(Education Centre) では、学年ごとに準備され
た教師用キット (Teacher's Kit) やワークシート
の豊富さと、次々とやってくる学校団体の賑わいぶ
りや博物館学習を意識した教育的な展示手法などに
圧倒されたのである。(写真-6, 7) さらに、ゴール

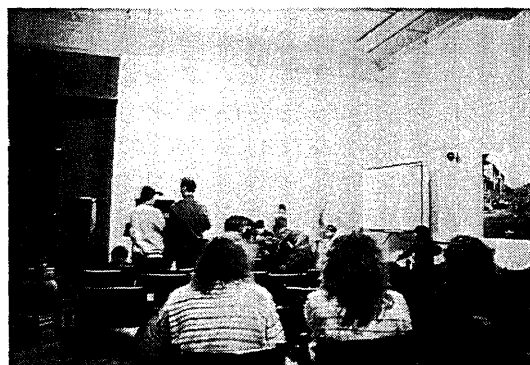


写真-5 タスマニア博物館での授業風景



写真-6 タロンガ動物園・展示パネル前での学習

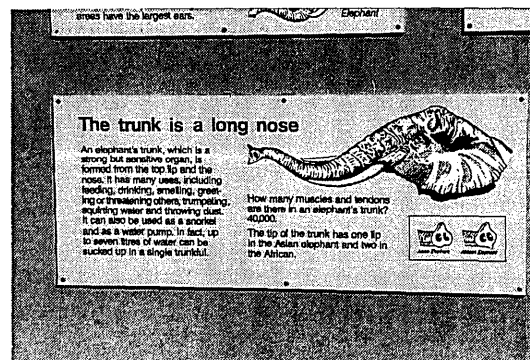


写真-7 タロンガ動物園・ゾウ展示パネル

ドコーストのシーワールド (Sea world) のような
遊園地と合体したレジャー施設と思われるところ
でも、りっぱな教育プログラム冊子が完備されて
おり、高校生までを対象として海と海の生物に
関する知識を高める体制ができているのである。
この他、ニューヨークのアメリカ自然史博物
館 (American Museum of Natural History) 正面
横の、学校団体専用入口に続々とやってくる
スクールバスの列と入場する生徒たちの印象は
鮮烈である。(写真-8) これらはほんの一例
であり、これ以外にもほとんどすべての博物
館に教育部が設置され、学校との密接な連
携のもと活発な教育プログラムが展開されて
いる。どこでもワークシートを手にした多くの
生徒たちが、博物館教師や学校教師の指導を
受けながら熱心に学習する姿を見ることが
できるのである。幼児期からのこうした体験
は、生涯の各時期における知的関心に
応じて、博物館を利用する自主的な態度を
確実に拡大するに違いないと思われる。博物
館をもっと教育的に活用して、いつでも誰
でも自然や歴史、文化、芸術などについて
のより深い理解を、楽しく身につけること
ができるようなシステムを社会的に確立する
ことが求められていると思うのである。

近年、日本の博物館でも盛んに教育普及活動が
展開されている。日本博物館協会が行った博物
館実態調査報告Ⅳ(注3)によると、学校との「
連携あり」と回答した博物館は、回答を寄せ
た博物館1117館のうち809館にのぼり、その
内容として「授業の一環として」と回答した
博物館が512館となっている。確かに利用
状況は増加しているが、実際には、連携内
容で「その他」の項目中に見られる、「ワークシ



写真-8 アメリカ自然史博物館前のスクールバス

ート等の共同開発と配布」「教員の研修」などの回答が、筆者の考える「博物館の教育的利用」の実態に近いものと考えている。

博物館側のこうした教育普及活動の努力にもかかわらず、すでに指摘したように、大多数の学校では、博物館は「単なる遠足・社会見学」の場という捉え方が支配的である。今、博物館側の意識・体制と学校側の意識・体制との乖離を、いかに解消していくのが双方に問われている。個性豊かな生き生きとした子どもたちの成長を実現するために、また「生涯学習時代」を真に内実のあるものとするために、この課題は、博物館と学校教育という直接の当事者だけでなく、それを取りまく行政、市民を含めた四者のそれぞれが具体的な対応を求められていると思うのである。

とりわけ、学校教育の現場では、前述したような個性重視の掛け声とは裏腹に、受験競争の一層の激化によって学校教育の閉塞的状况が生じつつあり、真に時代と社会の求める教育を創造することは焦眉の国民的課題となっている。この点で、社会教育施設の果たす役割は極めて大きいと考えられる。学校の壁を突破することのできる大きな力を持っているのは、市民に根ざし、市民とともに歩んできた豊かな経験の蓄積と豊富な情報発信力を持つ博物館であると思うのである。

このような国民的な課題の一つと考えられる博物館学習の抜本的強化のための大前提を確認した上で、筆者のこの間の博物館学習に関わる実践から得た教訓は、諸条件が整わない状況下で博物館学習を展開するには、教師の問題意識が最も重要であるということである。この場合の問題意識とは、今日の日本の教育と社会をめぐる情勢についての的確な把握であり、教師自らが豊かな感性と鋭い時代認識を持つ必要があるということである。

具体的な例としては、筆者が取り組んでいる博物館でのワークシートを利用した学習後のアンケート結果においても、このことが生徒の博物館学習の評価に反映されているのである。筆者や博物館学習の意義を比較的理解している教師が授業を担当するクラスにおける博物館学習への評価は、他のクラスに比べて肯定的評価をくだす生徒の数が倍近くに増えることが確認されている。これは、日常的に博物館

学習に関する話題を聞かされている生徒とそうでない生徒の意識の差があらわれたものと考えている。日常的な教師の適切な働きかけがあれば、生徒の意識を大きく変える事が可能なのである。従って、学校における教師集団内での博物館学習の意義を共通認識とすることは、博物館学習の展開に欠かすことのできない課題なのである。

そのために、博物館学習の経験交流と学習システムの研究・開発のためのネットワークを作る必要があると考えている。特に、この点での博物館側からの行政や学校に対する主導的役割が決定的に重要である。博物館に集う教育者、研究者が拡大していけば、より一層効果的な博物館利用の道が開けるに違いないと思うのである。また、学校側に関して言えば、教育委員会の役割が重要である。希望する教師への研修制度（学芸員資格取得や博物館での研修参加の保障）の確立や博物館を利用した体験学習を年間計画（行事や授業）に積極的に導入することへの助言、ネットワーク形成の条件整備など公的機関がなすべき課題は大きいと考えている。

5. おわりに

本論では、筆者が推進している博物館学習の教育的効果を、ワークシート活用という視点から明らかにした。また、博物館の教育的利用実践の意義が、現代日本の国民的課題にこたえるものでもあることを明らかにすることも目的であった。激動する現代の世界と日本をとりまく社会経済状況のなかで、世界的視野と的確な時代認識を持った、真に個性的で、創造的な子どもたちの成長を実現するという課題は、今日の学校とそれを取りまく地域、家庭をはじめ、すべての人々に対する鋭い問いかけである。後になって、「生涯学習」という掛け声だけが虚しく響いていたというようなことがあってはならないのである。まさに、待ったなしの人類の課題の中に博物館を位置づけ、それにこたえる具体的実践・研究こそ、博物館関係者と博物館に深い関心を寄せる学校教育関係者、研究者、市民に求められているのである。

21世紀を展望すれば、社会教育機関としての博物館における最大の課題が教育であることは、ますます明らかとなっている。国民一人ひとりが自国と世界の自然や歴史、文化、芸術などについての生き生

きとした理解を持ち、それらを愛し、誇りを持って行動できる主体として成長する課題に、博物館教育を通じて貢献することができる時代の到来が求められていると思うのである。

視点を変えて言えば、学校教育の中でこのような博物館学習が活発に展開され、定着、拡大していくならば、生涯学習時代の市民の学習権を保障すると同時に、現在の地球環境問題を解決し、21世紀を真に「自然と人間が共生する世紀」とする確かな保障になると思われる。こうした課題に積極的にこたえ

る実践、研究の具体的展開の拡大が望まれているのである。

注1 学校教育法施行規則の一部改正について（通達） 平成4年3月23日付け文初小第119号

注2 学校週五日制の実施について（通知）

平成4年3月23日付け文初小第296号

注3 日本博物館協会「博物館実態調査報告Ⅳ博物館における交流や他機関との連携について」

博物館研究 Vol.28 No.11